

人間嫌いの
ミザンスロープ・ヒューマニズム
——『ガリヴァー旅行記』とルネサンス・ヒューマニズム

中島 好伸

1. はじめに

本論は、現代においてヒューマニズムは何を意味するのか、また、もしヒューマニズムが行動原理となりうるならばそれはどのようなものか、を問う大きなテーマを検討するための資料となるべきものである。したがって、本論では『ガリヴァー旅行記』論を展開するが、文学論としての『ガリヴァー旅行記』論ではない。文学論であるならば『ガリヴァー旅行記』の批評史を踏まえなければならないが、それは18世紀イギリスの風刺作家としての文学史的評価をそのまま受け入れるものである。むしろ『ガリヴァー旅行記』を読むことで、そこから当時の世界観、ヒューマニズムを検討する材料を引き出してみようとするのが本論の目的だからである。

筆者の関心は、ヒューマニズムという思想が時代時代にどのような姿を見せるのか、下り下ってそれが現代においてどう表れるのかにある。とすれば、まずヒューマニズムとは何かを定義しなければならない。しかしそれは、14世紀から16世紀のヨーロッパで展開されたルネサンスの産物であり、キリスト教という神中心の世界観から人間中心の世界観へのパラダイム変換というのが常識的な定義であるとしても、その内実を言葉で表現するには、今の著者にとってはあまりにも荷が重すぎる。ルネサンス・ヒューマニズムとは時代のパラダイムを言うのであって、具体的な事象としてはあまりにも多様であるからだ。そこでとるべき方法は、二つの時代の比較による変化の考察となる。まずは文学作品を取り上げてこの作業を始めてみたい。次に時代変化の基準であるが、ルネサンスが中世の末期とすれば、明らかに近代以降の作品と比較することで、時代パラダイムとしてのヒューマニズムが近代以降の作品でどう扱われるかの変化を見ることができはずである。ここでは近代の父という評価をそのまま受け入れて、ルネ・デカルト（1596-1650）の『方法序説』（1637）を基準とし、その前のルネサンスとその後を比較の対象に据える。その考察の結果、ルネサンス・ヒューマニズムを支えた世界観と変化した世界観との差異を考えれば、現代におけるヒューマニズムの有り様や行動原理を議論することが可能となるはずだ

からである。したがって、本論の近代以降の作品にはジョナサン・スウィフト（1667—1745）の『ガリヴァー旅行記』（1726）を取り上げる。ルネサンス期の作品にはウィリアム・シェイクスピア（1564—1616）の『ハムレット』（1601）を参照する。

『ガリヴァー旅行記』といえば、クロード・ローソンの説明を待つまでもなく、「省略版が有名な児童文学本となり、人間存在の最も辛辣な風刺本の一つ」である^{注1}。しかもその痛烈な人間風刺はヒューマニズムとは相いれないもののようにも感じられる。しかしこのような作者ジョナサン・スウィフトの眼差しは、単なる笑いをもたらす物語作者のポーズとは思えず、人間の未来を見つめる真摯な姿勢を感じさせる。先のローソンは、『ガリヴァー旅行記』のテキスト所収イントロダクションの中で、次のようにその姿勢を見ている。一見「旅行記」の体裁をなす本書の背後には、「（ギリシャ・ローマの）古典、ヘロドトスからプリニウス、モンテーニュに至るルネサンス民俗学を生涯読み漁り、歴史や同時代の文化、社会、政治への生き生きとした関心が隠されている」（Rawson, p.x）と。ならば、スウィフトはルネサンス期の世界観に通暁していたはずで、本論としては格好の作家となる。しかも『ガリヴァー旅行記』の反ヒューマニズムとも言える人間風刺（またはミザンスロープ）を検討することは、ヒューマニズムにとっても有益なことに違いない。ひとまずは、現代におけるヒューマニズムを議論する手がかりが見つかれば、本論の目的は達成したことになる。

2. ヒューマニズムから人間嫌いに

『ガリヴァー旅行記』は1699年から1715年までの4回の航海により構成され、それぞれ「リリパット（小人国）航海記」「プログディンナッグ（大人国）航海記」「ラピュタ、バルニバービ、グラブダブドリップ、ラグナグおよび日本航海記」（以後「ラピュタ」と略記）「フウイヌム国航海記」と名付けられている。ことの始まりから、海へ出ること（「旅をすること」とガリヴァーは語っているが、「航海術を学んだ」目的は明らかに「海へ出ること」だった）は「自分に運命づけられたこと」^{注2}と語るガリヴァーは、地上の生活、つまり人間社会をどちらかという忌避する性格として位置づいているのかもしれない。まるで18、9世紀の都会人が、慰めを求めて田園へと出ていく先駆けであるかのようなのである。しかしそのことが顕著になるのが4度目の航海、「フウイヌム国航海記」である。理性の塊とも言うべきフウイヌムという馬が人間の形をしたヤフーという獣を支配する国を訪れ、次第に人間嫌いに陥っていくさまが描かれる。

フウイヌム国よりイギリスに帰還したガリヴァーは、家族を前にして、「吾輩自身が、ヤフー族の一匹と交合して、すでに一人ならず子までなしていることを考えると、恥辱とも、当惑とも、恐怖とも、まったく名状し難い気持ちにおそわれる」とまで言う。そのうえで妻に抱擁され「一時間ばかりの気を失ってぶっ倒れてしまった」（271）ほどだ。

確かに、1725年9月29日付アレグザンダー・ポウプ宛の手紙にスイフトは、「わたしの旅行記の全構造はミザンスロープ^{人間嫌}…というこの大きな土台の上に築かれている」(Rawson xxxiv) と言い、まるでガリヴァーが初めから人間嫌いであるかのように言われているが、しかしガリヴァーはもともと人間嫌いではないと言いたい。フウイヌム国で初めてヤフーに出会ったとき彼は次のように語っている。

まだ当時の我輩だから、人間愛 (Lovers of Mankind) にかけてはほとんど誰にもひけをとらないつもりだったが…。(215)

思えばガリヴァーの航海は初めから好奇心に充ちていたと言ってもいい。それぞれの土地に上陸するや住民が使用する言語を身につけようとする。たとえばプロブディンナッグの農夫の娘は、ガリヴァーが指さしたものを現地語で発音してくれ、「二、三日もすると何でも欲しいものは言えるようになった」(86)。フウイヌムの言語は難しかったが、「吾輩は手当り次第に、物を指しては聞いた。そして一人になると、それを手帳に書き留めておいて、発音の悪いところは、家のものに何度も発音してもらって匡正していった」(218) と言う。彼はコミュニケーションの手段を第一に身につけ、その上で現地人と意志の疎通を図る。もちろんこれは、ガリヴァーが他者との交流を求めていることの証である。その結果、リリパットの歴史やプロブディンナッグの宮廷、ラピュタの仕組み、フウイヌムの世界観など、『ガリヴァー旅行記』を構成する情報を引き出す。すなわち、ガリヴァーの本性は、本人も主張するように、人間愛に根ざしていると言って間違いない。

とすれば、ガリヴァーの人間嫌いとは何だろうか。『ガリヴァー旅行記』の最大の問題は、ガリヴァーはなぜ人間嫌いに陥るのか、彼の人間嫌いとは何かである。もちろん、そのヒントはフウイヌムとの議論に見ることができる。フウイヌムには「疑う」という概念がない。また「欲望」や「感情」を表す言葉の数は少なく、「暴力」も考えられない。「結局は理性が暴力 (Brutal Strength) に打ち克つにきまっているからだ」(225) とフウイヌムの主人は言う。このユートピア的とも言えるフウイヌム国が何を表しているかは次節にゆずるとして、まずはガリヴァーの語る現実 (作品中のヨーロッパ) の人間についてまとめておこう。人間が悪徳をおかすのは「欲望」があるからだ。「吾輩は権力欲、物欲、あるいは情欲、不節制、憎悪、嫉妬というものの恐るべき結果について」(227) 説明した。そして「戦争」、「植民地政策」と人間の悪徳は広がっていく。『ガリヴァー旅行記』の最後が植民地政策反対論で終わっているのは、植民地政策がガリヴァーの人間嫌いに関係していると見られるからである。少し長くなるが引用しておこう。

しかし吾輩が、これら新発見によって、わが陛下の領土を拡張することに心進まなかったというのには、いま一つ理由があった。正直に言ってしまえば、かねて我輩はこうし

た場合、君主がその正義を推し及ぼす方法に関して多少の疑念を持っていたのである。たとえば一隊の海賊が、暴風雨に吹かれて何処とも知らず漂流し、ついにボーイの一人が檣頭から陸地を発見する。上陸して掠奪する。無辜の住民に邂逅して、親切な待遇を受ける。そして国土に新しく命名し、国王のために領有宣言を行って、記念に腐った板切れや石柱を建てる。それから原住民が二、三十人殺され、一組の男女が見本に無理に連れて行かれる。そして帰国すれば、彼らの罪業はすべて特赦を受ける。さてここでいわゆる神権享有者の名前によってなされる新領土の礎石がはじまるのだ。すなわち、さっそく船が派遣されて、原住民たちは放逐されるか、殺戮されるかするし、酋長たちは拷問の苦しさにすっかり所有金を吐き出してしまう。あらゆる残忍 (all Acts of Inhumanity)、貪婪が公然と許容され、大地は民の血に腐臭を放つのだ。そしてこの敬虔きわまる遠征に従事する呪うべき殺戮者の一隊こそ、実に彼らのいわゆる偶像崇拝者である蛮民どもの改宗、開花を目的に送られるという、近代植民の実状であるのである。(275)

1710年に出発する第4の航海ゆえ、フウイヌムの主人に語ったフランスとの戦いはスペイン継承戦争を暗示していることは容易に想像がつく。このヨーロッパの戦いは、またアン女王戦争とよばれる新大陸の植民地争いでもあった。振り返れば、ヨーロッパ戦争の言及はフウイヌムの部分に留まらない。第一部リリパットの冒険では、卵の割方から始まったというリリパットとブレフスキューの戦争がイギリスとフランスの戦いを暗示しているのはほぼ定説である。^{註3}と、このように見てくると、『ガリヴァー旅行記』自体大航海時代に仮託した枠組みを持ちながら、大航海時代以降展開される植民地政策の実態を鋭く見抜き、人間の欲深さや非人道的な在り方を指摘していることになる。すなわち、ガリヴァーの人間嫌いは、近代の植民地政策と結びつくことになるが、とすると、植民地政策の遠因と位置付けられた人間の欲望を含みこむことになり、普遍的な人間全体を嫌悪するに至ったともとることができる。しかし、これは正しいだろうか。もしそうだとすると、ガリヴァーの好奇心、知りたいとする欲望も否定され、結局は自己否定をすることになる。人間のもった知りたいとする欲望は否定せず、近代以降の植民地政策を彼は嫌悪すると見た方が妥当のように思われるが、それはガリヴァーが賛美するフウイヌムの主人の特徴とも重なる。主人はガリヴァーの説明するヨーロッパに関心を抱き、彼から次々と引き出そうとしているからである。

それでは、このフウイヌムとは何を意味するのだろうか。そしてガリヴァーの好奇心、並びにフウイヌムの好奇心とは何か、次にそれを見てみよう。

3. フウイヌム——ルネサンスの人間観

フウイヌムに触れてガリヴァーは人間嫌いに陥るが、このフウイヌムは、『ガリヴァー

旅行記』において何を意味しているのだろうか。主人フウイヌムによれば、フウイヌム (Houyhnhnms) というのは馬を意味するフウイヌム語で、「自然の完成物 (the Perfection of Nature)」(219) を意味する。フウイヌムたちにとって、「自然」とは「万物を完全へ、完全へと促し進め」、また逆に「何かの影響でその状態を失った」(236) 場合、それは病と呼ばれる。さらにフウイヌムの主人がガリヴァーの手を指して、足としての機能をなしていない、「前足を口もとまで持ってこなければなにひとつたべられない。自然は、ただその必要のためだけにそうした関節を与えているのだろう」(225) と言ったり、ガリヴァーが露出は勘弁してほしいと言う腰の部分については「自然が自ら与えておきながら、それを隠せと教えるなどということはどうて考えられない」(220) と議論を展開する。すなわち、自然は完全であり、フウイヌムはその一形態である。ゆえにフウイヌムと自然は一体で、フウイヌムの個体と自然は交流し、感応しあう。

このような人間（フウイヌムを人間に置き換えて）と自然との交流・一体感はルネサンス期のコスモス論で説明がつく。有名なのは、レオナルド・ダ・ヴィンチの「ウィトルウィウスの人体図」であるが、言うまでもなく、1487年ころ描かれた裸の男性が両手両足を開き、この人体図に接するように円と方形が描かれた絵である。その円と方形の解釈はいくくにもあるらしいが、ルネサンス期の人間観を説明するものとして、人間の精神的な中心を示す円と人間の物質的重心を描く方形という解釈がある。そしてこの精神を表す円と物質を表す方形は重なり合っているが故に、双方の相関関係を意味するという解釈だ。この解釈は、物質世界（自然）を表すマクロコスモスと精神世界（人間）を表すミクロコスモスが密接な関係にあると考えていたルネサンス期の世界観、または人間観を見事に描きだしていると言える。とすれば、フウイヌムの世界（生命）観はこのルネサンス期の人間観と極めて近いものとなる。

もちろん、このようなルネサンスの人間観はネオプラトニズムと呼ばれるギリシャ・ローマの研究からルネサンス期に生まれたものである。スイフトがユートピア的フウイヌムを描こうとしてプラトンの『国家』やトマス・モアの『ユートピア』をモデルとしたこと (Rawson p.xxxiv) はそのままフウイヌムの世界観がルネサンス的であることの証にもなる。エラスムスを師とするトマス・モアであってみれば、フウイヌムの世界観そのものをヒューマニズムと呼んでも許容されるのではないだろうか。フウイヌムの持つ知的好奇心もルネサンス的だと敷衍することができるからだ。しかしながら、ここでの問題は、ユートピア的なフウイヌムがスイフトにとってなぜ過去の産物と結びつくのかである。これにはガリヴァーの抱いた人間嫌いが関係してくると思われるが、『ガリヴァー旅行記』をヒューマニズム的に読む鍵がここにありそうだ。

そこで、ルネサンス期の作品から世界観を引き出して、どう似ていて違うところがあるとするればそれは何か、それはガリヴァーの人間嫌いとどう関係するのか、検討してみたい。ルネサンス期の作品として取り上げるのはシェイクスピアの『ハムレット』である。

『ハムレット』は亡霊の出現から始まる。彼の死んだ父の亡霊だ。自分は殺されたのだから復讐せよとハムレットに諭す。ハムレットは亡霊の言うことを真に受けて、ヴィッテンベルクに留学しているホレーシオに対して「デンマークは牢獄だ」^{注4}「この天と地のあいだにはな、ホレーシオ、哲学などの思いもよらぬことがあるのだ」(Shakespeare 1-5-165)と云う。もちろんヴィッテンベルクはマルチン・ルターが宗教改革を始めた地であり、近代を象徴する最先端の地であると言える。そこでは哲学(自然科学)が議論され、時を同じくして話題となっていたガリレオの地動説も議論されていたことであろう。その意味ではホレーシオは近代を象徴した人物として設定されている。それに対して、ハムレットは亡霊の言うことを信じようとしているが、その根拠は、大自然で起こった異変は人間の中にある悪が原因であり、その悪故に亡霊があらわれたという思考である。ハムレットはこの後、亡霊の言うことを信じて行動して良いのかいけないのか逡巡し、あの有名な独白 *To be or not to be, that is the question.* (Shakespeare 3-1-55) が用意される。『ハムレット』という作品が中世と近代の中間に位置するという根拠だが、いづれにしてもハムレットがルネサンス的思考を負わされた人物であることに間違いはない。ハムレットの独白は次のように続く。

ハムレット このままでいいのか、いけないのかそれが問題だ
 …… (中略) …… 死ぬ、眠る、
 それだけだ。眠ることによって終止符はうてる、
 心の悩みにも、肉体につきまとう
 かずかずの苦しみにも、それこそ願ってもない
 終わりではないか。 Shakespeare, 3-1-55-63

ここから読み取れるハムレットの心理は「死」の希求とそれに対する恐怖であるが、「死」の状態は「願ってもない」状態 (*it's a consummation/Devoutly to be wished*) と語られ、*consummation* (完全) という言葉が使われている。一方、生きることは、「心の悩み」「肉体につきまとうかずかずの苦しみ」に耐えること。英語では *The heartache and the thousand natural shocks/That flesh is heir to;* である。キリスト教の権威が相対的に低下したときに、ギリシャ・ローマの古典は人間の可能性を教えてくれた。それは人間が、神の完全性に対して、不完全性を受容することでもあった。不完全を引き受けた (*heir*) 肉体を賛美することになったのである。人間中心主義とはこのような意味がある。そして重要なことは、精神と肉体が対等に扱われ、ミクロコスモスとマクロコスモスの関係と同じように、両者は交流、感応しあっていることである。

フウイヌムの世界観(人間観と言ってよければ人間観)は、確かに、自然と個体との交流、感応という意味において、ルネサンスの人間観と軸を一にする。しかし、まったく人

間と形態を同じくするヤフーを切り離すことによってフウイヌムはユートピアとして成立しているところにも注目しておこう。『ハムレット』において、死を自然との一体化として受け入れながらも、個としての消滅を恐れる「わたし」の存在を見ることもできる。そればかりか、自分の欲望のために先王を殺害し（現王クローディアス）、自分の欲望を満たすために夫の死後ひと月も経たないうちに再婚する（母ガートルード）、『ハムレット』という芝居が、ハムレットの悩みがここからスタートしていることも重要である。すなわち、原罪を含めた不完全を受け入れた人間が、神の規制をなくした時に、自らどのようにモラルを形成するののかの問題である。『ガリヴァー旅行記』では、ヤフーという存在を切り離した。もちろんガリヴァーの人間嫌いはこのヤフーによってもたらされているのだから、先の植民地政策とヤフーは密接に関係しているはずである。言い換えれば、禁断の知識を犯して人間は知的欲求を手に入れた。ルネサンス・ヒューマニズムはその不完全性を引き受けた。しかし、この欲求はさらに拡大していく。「わたし」という存在が欲望を満たすということはどういうことを意味しているのだろうか。人間と欲望の問題であるが、本稿においては、フウイヌムのユートピアがルネサンス的人間観を負っていることにとどめ、欲望の問題は別の稿に改めて追及したい。

4. 「ラピュタ」の科学思想

一般に近代の科学思想はデカルトの合理主義から始まると言われる。われわれはこれまで、『ガリヴァー旅行記』のフウイヌムをルネサンスの世界観・人間観に類似しているを見てきたが、実はデカルトは、ルネサンスと『ガリヴァー旅行記』の中間に位置する。面白いことに、『ガリヴァー旅行記』の中にはフウイヌムがデカルト以前であることをほのめかす一節がある。「この国では、疑うとか、信じないとかということばはほとんどない」(223) という一節である。まずデカルトの懐疑を思い出そう。『方法序説』によれば、つぎのようにある。

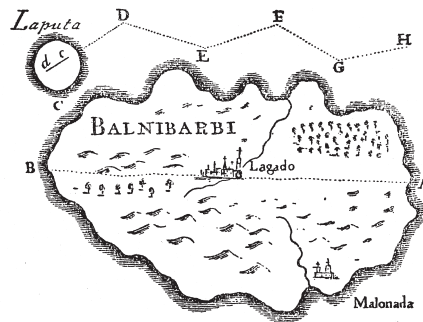
ほんの少しでも疑いをかけうるものは全部、絶対的に誤りとして廃棄すべきであり、その後で、わたしの信念のなかにまったく疑いえない何かが残るかどうかを見きわめねばならない、と考えた。……（中略）……このようにすべてを偽と考えようとする間も、そう考えているこのわたしは必然的に何ものかでなければならない、と。そして、「わたしは考える、ゆえにわたしは存在する〔ワレ惟ウ、故ニワレ在リ〕」というこの真理は、懐疑論者たちのどんな途方もない想定といえども揺るがしえないほど堅固で確実なのを認め、この真理を、求めていた哲学の第一原理として、ためらうことなく受け入れられる、と判断した。（下線部筆者）^{注5}

以上のように「コギト」(下線部)を導きだしたデカルトは、世界に法則を見出し、「世界に存在し生成するすべてのものにおいて、それらの法則が正確に守られている」(Descartes 35)ことを認識する。近代の科学思想の始まりである。^{注6}つまり、懐疑から近代がはじまったと言い換えることができるとすれば、「疑い」を知らないフウイヌムは近代を迎える前、すなわちデカルト以前を意味することになるだろう。

『ガリヴァー旅行記』において、科学思想と言えばラピユタがある。「ラピユタ」は作品では「フウイヌム国航海記」の前に置かれているが、執筆の順番は「ラピユタ」が一番最後であるため、「フウイヌム国航海記」「ラピユタ」すなわちルネサンス—科学思想の順番に思考されていたことが分かる。

ラピユタは数学・科学をモチーフとした浮島である。たとえば島には、「さまざまな六分儀や四分儀や望遠鏡や天体観測器や、その他おびただしい天文器械類がおいてある」。(154-155) そればかりか、島そのものの動きが数学的正確さを持っている。

島はこの斜行運動によって王国領土の各地へ運転されて行く。今その進行の状況を説明するために、ABをもってバルニバービ全領土を横断して引かれた任意の一線としよう、次に線分cdは磁石を表す、しかしdは反発極であり、同じくcは牽引極とする。かりに今、島がC点にあるとして、もしこの磁極を反発極を下にしてcdの位置に置くとするならば、島はななめ上方D点に向かって上昇を開始するであろう。次にD点に達した時、枢軸によって磁石を回転し、今度は牽引極がE点に向くようにすれば、島もまた斜めにE点に到達するであろう。さらにふたたび枢軸によって、反発極を下にしてEFの方向に磁石を動かす時は、島はFに向かって斜めに上昇する。そこでまた牽引極をGに向けると、島もG点に至る。さらにGからHへと、これは反発極を下に向くようにすればよいのである。こんなふうにして必要な度ごとに磁石の方向を変えてさえやれば、島は代る代る斜めに昇ったり降ったりして、これで(斜めの傾きはたいしたことではないのだから)領土内のある場所からある場所へ自由に動くことができる。(pp.155-157 図参照)



バルニバービとラピユタ (*Gulliver's Travels*, Oxford World's Classics : Oxford UP, 2008. p.156)

ガリヴァーの言語がそのまま数学と化したような印象を受けるが、それはラピュタ人の言語を翻訳したためである。ラピュタは数学によって自由を獲得している。

しかしそこに住む住人は、「始終なにか深い思索に熱中していて、なにか外からそれぞれの器官に刺激でも与えてやらなければ、物も言えなければ、他人の話に耳を傾けることもできない」(146)。したがって、傍に従者をしたがえ、クリメノールという名のたつき棒を持ち、主人の耳をぼんぼん叩かなければならないという。これは、イアン・ヒギンズの注によれば、アイザック・ニュートンおよび同時代の科学者を風刺しているという。目覚ましい科学の進歩に対して、人間性の弛緩が揶揄されているのである。もちろん、浮き島ラピュタは万有引力の法則に逆らうものとして、ニュートンを批判的に捉えているものと思われる。

デカルトのコギトが物質から精神を切り離すことによって近代科学主義をスタートさせたとすれば、その最初に位置する科学的成果がニュートンであろう。ガリヴァーがこのニュートンを人間性の弛緩として描いたことは、ルネサンス期の精神・物質の一元論から、デカルトの両者の分離を通して、物質的世界観の優位を表わそうとしている。その最大の証拠が数学的世界観であり、ラピュタはこれを象徴する。言い換えるならば、ガリヴァーの人間嫌いはこの物質的世界観であると言えないだろうか。人間の有限性に対して、物質を永遠に存在するものと仮定すると、人間の物質化は死の克服に繋がる。ガリヴァーがラピュタの次に向かうのが、死なない人間スプラグドクラブであることは偶然ではない。

ガリヴァーはルネサンス的ヒューマニズム、つまり精神と物質を一体のものとして捉える人間観を賛美するところから、物質だけを探求する科学主義や物を獲得しようとする経済優先主義（植民地政策）を人間の愚かしさと捉え、ある意味ではフウイヌムを賛美することによって精神を取り戻そうとしているように思われる。ガリヴァーの人間嫌いは近代批判なのである。

5. 『ガリヴァー旅行記』 から学ぶ

本論をまとめてみよう。ガリヴァーはフウイヌムの高潔さ、ヤフーの醜さに触れて人間嫌いになった。フウイヌムの世界観はフウイヌムと自然を一体に考えるルネサンス・ヒューマニズムと同根のものである。しかし人間は、デカルトの精神と物質を切り離す思考を通して、科学的知識を獲得し、植民地政策のような分捕り合戦を展開する。ガリヴァーの人間嫌いはこのような人間に向けられていた。^{注7}ここからわれわれは何を学ぶことができるのだろうか。

ルネサンス・ヒューマニズムは、人間が不完全な存在であることを認めることから始まる。キリスト教の教えから言えば、人間は原罪を背負った存在なのである。しかし人間は、

その代償（罰）として知識を獲得した。ルネサンス・ヒューマニズムが人間を肯定する際、この知的欲望は最大の可能性を秘めていたことになる。したがってガリヴァーはルネサンス的知的欲求の塊であり、ルネサンス的世界観を同根に持つフウイヌムにもこの欲求は与えられている。ならば科学的知識を獲得したデカルト以降の近代はガリヴァーによって賛美されるはずであるが、実際には人間嫌悪に陥っているのだ。ガリヴァーに賛美されたフウイヌムとデカルト以降の人間と何が違うのだろうか。このことは、同じ欲望の塊でありながら、知識を獲得した人間とヤフーを同一視するガリヴァーの真意はどこにあるのかを問うことでもある。

前節でも触れたように、デカルトは精神と物質を分離することによって科学を前進させた。フウイヌムは自然と一体であることにより精神と物質を一元的に考える。ルネサンス的だと考える根拠である。科学の粋を集めたラピュタ人は物質を高めながら精神を弛緩させ、ガリヴァーにより擲揄される。すなわち、デカルトに端を発した科学主義は、精神を置き去りにした物質万能主義だったことになる。フウイヌムがユートピア的に映るのは、物質主義の進歩と精神性が軸を合わせて高度化するからであろう。精神と物質の一元化という意味では、ルネサンス・ヒューマニズムをそのまま近代化したことを意味するからである。

このように見てくると、『ガリヴァー旅行記』から学べることは、置き去りにされた精神性を物資主義のレベルまで高めることである。ガリヴァーは風刺という手法でこの試みを行っているが、もしも精神と物質の一元化をヒューマニズムと呼べるとすれば、これを求める行動をとることが、近代人の行動原理になるのではないか。トールミンも述べるように、進歩した物質主義に少しでも精神を近づける努力、このことが近代人には求められるのであろう。^{注8}

注

-
1. Claude Rawson, Introduction to *Gulliver's Travels*. Oxford World's Classics: Oxford UP, 2008. p.x 以後、本文からの引用は、Rawsonと明記して頁数を明記する。
 2. Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*. Oxford World's Classics : Oxford UP, 2008. p.271 以後、本書からの引用は本文中引用後のカッコつき数字にて示す。なお、訳文は中野好夫訳『ガリヴァー旅行記』新潮文庫2008年を使用した。
 3. 脚注者イアン・ヒギンズによれば、「イギリスはカトリック・フランスと1689年から1697年までと、さらに1701年から13年（スペイン継承戦争）まで一戦を交えた」と説明している。Ibid., p.295.『ガリヴァー旅行記』が、ヨーロッパ帝国主義の先兵としての『ロビンソン・クルーソー』と比較され、近代植民地政策批判になっていることは、大塚久雄の論を待つまでもない（『ロビンソン・クルーソー』岩波文庫参照）。

4. William Shakespeare, *Hamlet*. Arden Shakespeare, 2006 p.466 Act II Scene II F2-2-2-242 訳は小田島雄志『ハムレット』白水Uブックス1996年を使用した。
5. Rene Descartes, *A Discourse on the Method*. Ian Maclean trans. Oxford World Classics, 2006. pp.28-29 以下引用は本書による。翻訳はデカルト『方法序説』（谷川多佳子訳）岩波文庫2010年を使用した。
6. スティーヴン・トールミンは『近代とは何か』の序文で、「デカルトに始まる哲学の『理論中心』のスタイルが（一言でいえば）近代哲学であり、一方、逆に『近代哲学』はほとんど理論中心の哲学である」と言っている。スティーヴン・トールミン『近代とは何か』法政大学出版局、2001年 p.16
7. 『ガリヴァー旅行記』を文学的に議論するとすれば、その語りが問題となろう。本論ではこの問題を完全に無視しているが、作者スイフトは風刺を目的としてレミュエル・ガリヴァーという人物を設定している。しかしながら、最後の植民地批判のように作者の主張が語り手を超えて出ている部分も多くあり、この点が完全な小説にはなっていない一因であろう。イギリスにおいて最初の近代小説はサミュエル・リチャードソンの『パメラ』（1740）であることが定説となっている。
8. スティーヴン・トールミン『近代とは何か』トールミンは言う。「これからの時代の課題は、ニュートン科学と工学の持つ技術的・数学的正確さ、ルネサンス人文主義の伝統に属する著述家によって提唱された人間の性格やこまごました経験に対する関心と結びつけることである。」日本語版への序文 xv

なかじま よしのぶ（家族・地域支援学科・英米文学）